†準優勝の記念写真に収まる静高ナイン。石山氏は最前列の右から4人目に準優勝盾を手にしている
（静中静高野球部OB会所蔵）

1960年（昭和35年）夏
第42回全国高等学校野球選手権大会
◎1960年8月21日　決勝戦

法政二	0	0	0	0	1	2	0	0	0	3
静　岡	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

法政二		打数	安打	打点
(左)	的場	4	1	1
(遊)	幕田	3	1	0
(二)	高井	4	2	0
(中)	橋野	4	2	0
(投)	柴田	3	0	0
(捕)	奈良	4	1	2
(三)	是久	4	2	0
(一)	西山	2	1	0
(右)	山田	4	0	0

打	安	振	四	犠	盗
32	10	2	2	2	0

静　岡		打数	安打	打点
(左)	花城	4	0	0
(二)	稲葉	4	2	0
(遊)	石山	4	0	0
(捕)	渡辺	4	1	0
(右)	佐野	3	0	0
(中)	田原	2	0	0
(一)	横山	1	0	0
(三)	大塚	3	0	0
(投)	石田	3	0	0

打	安	振	四	犠	盗
28	3	8	3	0	1

▽三塁打＝奈良▽二塁打＝的場▽併殺＝法2、静1▽残塁＝法6、静4

静中静高「甲子園の栄光」②

「Shizuoka」をけん引した主将 石山建一

［77期・1958～60年在籍／内野手・主将］

勝利への執念こそが原動力だった。中学2年時に見た静高が、甲子園で初戦5連敗を喫すると一念発起。自らの手で〝ジンクス〟を破ろうと決意を固め、結果で示してきた。勝つか、負けるかの瀬戸際――。のちの名将の原点が静高にあった。（文中敬称略）

取材・構成＝上原伸一

1960年夏・準優勝

指導者としてのベースになっている静高の教え

「ああ、俺はこれを聞くために頑張ってきたんだな」。60年夏の甲子園。石山健一主将は大社との1回戦に勝って、母校の校歌が流れると感慨にふけった。話は5年前の夏にさかのぼる。高松中2年の石山は野球部の練習を終え、宿直室の前を通りかかった。この日、甲子園では静岡と伊那北（長野）の試合が、高校野球史上初のナイターで行われていた（56年夏）。結果が知りたい石山は担任の牧野明先生（静岡学園元理事長）に訊ねる。「すると『負けたよ』と教えてくれた後、牧野先生は実に悔しそうな顔で『またもジンクスが破れなかった』と言うんです。牧野先生は静高出身でしてね。聞けば、静岡高は甲子園には出場するんだけど、いつも初戦の壁に阻まれるのがジンクスだと」

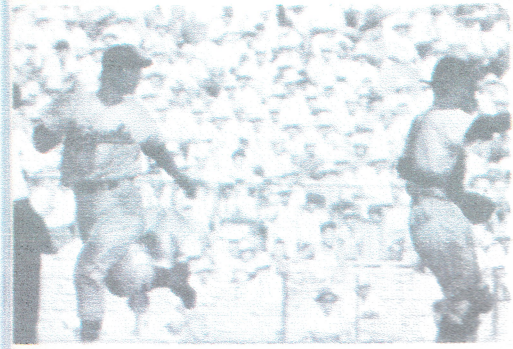
静岡は旧制静岡中時代の30年夏に準々決勝に進出して以降、戦前は春夏計4大会で、すべて初戦敗退。戦後も48年夏に1勝しただけで、49年夏、51年春、51年夏、55年夏、56年夏と初戦敗退が続いていた。

ならば自分が静高に入って、そのジンクスを破ろう――。石山は早速翌日から、トレーニングを始める。足腰を強くするために毎朝、実家近くにあった久能山東照宮の1159段の石段を上り下りし、風呂に入った時は「握りこぶしほどの石を握り、湯の中で左右それぞれ200回ずつ振って手首を鍛えました」。自転車通学の時間も握力強化に充て、軟式のテニスボールを交互に握った。

中学時代、県大会2連覇を果たした石山が静高に入学すると「これは後で聞いた話ですが、甲子園で勝つために『石山中心のチームを3年計画で作ろう』ということになっていたそうです」。指導者も石山の入学とともに、高木容平がコーチとして加わり（のち監督）、田口一男監督との2人体制に。高木は静岡中時代の32年の春と夏、三塁手として甲子園に出場した経験を持つ。練習はひたすら厳しく、石山が自宅に帰るのはい

つも11時頃だったが「勝つためだけの練習ではなかった」という。「これは静高の伝統でもあるんですが、高校で伸ばし切らずに、選手の先を見据えた指導をされていましたね。後年、私が指導者になった時、この静高のスタイルが私の指導のベースになりました」

石山は順当に1年秋より正遊撃手となり、静高は翌春の東海大会で優勝を飾る。その夏は優勝候補筆頭で、甲子園出場が有力視されていた。選手たちもその気になっていた。ところが静岡市立に足元をすくわれてしまう。石山は「甲子園に出るのはそう簡単ではないと思い知らされました」。それでも石山が主将になった2年秋は県大会で優勝を果たす。センバツの重要資料となる東海大会は、甚大な被害をもたらした伊勢湾台風の影響で中止になったが「その秋の関東大会で優勝した慶應義塾高（神奈川）に練習試合で勝っていたのも評価されて、センバツに選ばれました」。慶應のエースは、のちに慶大で東京六大学史上初の完全試合を達成した渡辺泰輔（のち南海）だった。



←中学時代に2度の県大会制覇。鳴り物入りで入学してきた遊撃手は、3年時には当然のように主将就任。攻守走にわたるアグレッシブなプレーでチームを盛り上げた

1960夏　第42回全国高等学校野球選手権大会

回戦	スコア	対戦校	都道府県	備考
1回戦	○2－0	大社	島根	
2回戦	○1－0	秋田商	秋田	
準々決勝	○3－2	北海	南北海道	
準決勝	○3－1	徳島商	徳島	
決勝	●0－3	法政二	神奈川	

初戦のビッグプレーで勢い乗り34ぶり決勝進出

60年春、石山にチャンスがやってきた。だが、優勝候補の静高は平安との1回戦で、延長10回の末に敗れる。石山は「本当に悔しかった。こうなったら夏こそはと、気持ちを切り替えた」と述懐する。最後の夏、チームの大きな力になったのが、6月頃から台頭してきた2年生投手・石田勝広（のち早大）だった。「全体練習で散々走り込んだ後も、当時隣接していた静岡大の陸上トラックを毎日40周走っていた」という石田はエースの座をつかみ、春夏連続甲子園出場の立役者の1人となった。

冒頭の通り、静岡高は大社との1回戦で18年ぶりに校旗がはためく。完封勝ちの石田を波に乗せたのは石山のプレーだった。初回、遊撃手の石山は相手先頭打者・中筋和美が放ったセンターへ抜けそうな打球に飛び込み、見事これをアウトにする。

「大社高の中筋主将は脚力がある。初戦の立ち上がりは緊張しますからね。もし抜けたら、2年生エースの石田が浮き足立ってしまうと、必死にグラブを出したんですよ」。〝ジンクス打破〟にかける石山の執念が生んだビッグプレーであった。石田は秋田商との2回戦でも無失点と好投し、静高は1対0で競り勝つ。しかし試合後、石山ら3年生の攻撃陣は「高木監督から『2年生の石田がよく投げているのだから、お前たちはもっと援護しろ』とゲキを飛ばされましてね」。これに発奮した三番・石山は、次戦の北海との準々決勝で決勝三塁打。静高の勢いは止まらず、準決勝も制し、旧制静岡中時代に全国制覇した26年（大正15年）夏以来の決勝に進出した。

準優勝で想像をはるかに越えていた地元凱旋

全国制覇まであと1勝――。相手は翌年に〝史上最高のチーム〟とうたわれた法政二高（神奈川）だった。

「私は勝つ気満々。優勝するつもりだった。でも他の連中はそうでもなくて（苦笑）。主将の私が前の晩『明日の決勝に備えて早く寝よう』と言うと『もういいじゃない。負けても全国で2番なんだから』と返してきましてね。静岡県人はお人好しというか、欲がないんですよ（笑）」

静岡高は2年生エース・柴田勲（のち巨人）に抑えられ、0対3で敗れる。石山はむろん準優勝では満足できなかった。「悔しかったですよ。表彰式の間もずっと口を真一文字に結んでいました」。当時の準優勝盾を持つ石山の写真を見ても表情は険しい。しかし静岡に帰ると、準優勝にも関わらず、地元はお祭り騒ぎだった。

「静岡の駅前に出てみると、もう人、人、人でしてね。5万人はいたそうです。でも私たちは『今日は静岡祭りだっけ？』『いや、それは4月だよ』『だったらこの人出は？』と話をしていたんです（笑）」

あまりの人の多さに、これでは将棋倒しの事故が起きると、駅前で行われる予定だったセレモニーは中止に。選手たちはオープンカー代わりのトラックに乗せられ、学校までのパレードが始まった。石山は当時の写真を手にこう振り返る。

「準優勝なのにこれだけの人に出迎えてくれた……それは、私たちが静高の選手だったからだと思います。静岡の人たちは静高を、静岡を代表する高校として愛してくれているんです。ただその分、静岡の期待も背負っています。今の選手たちも、そのことを分かってほしいですね」

石山は静岡高卒業後、早大と日本石油でも活躍。指導者に転じてからは、早大とプリンスホテルを日本一へ導いた。その手腕と選手を見る眼力には定評があり、72歳の今も全国各地から指導の依頼が後を絶たない。早大の1年先輩である大井道夫監督から請われて8年間、特別コーチとして指導を行った日本文理（新潟）には打撃術を授け、09年夏の準優勝に寄与。また12年からは、埼玉の県立である小鹿野高を定期的に指導している。ただ、石山が一番気になるのはやはり静高。母校には選手時代から、たびたび指導に訪れている。

「私の後に甲子園に出場した歴代の監督とは全員、関わっています。静高は地元の期待が大きいので、監督の重圧は並大抵ではないんですよ。ですから、これからもできるだけのサポートをしたいと思っています」

石山も1人のOBとして、今春の甲子園で静高の純白のユニフォームが躍動するのを心待ちにしている。

「静岡の人たちは静高を、静岡を代表する高校として愛してくれている」

PROFILE

いしやま・けんいち●1942年9月6日生まれ。静岡県出身。高松中時代は2年連続県大会優勝。静岡高では3年時に主将兼三番・遊撃手で春夏連続甲子園出場。夏は準優勝。早大では4年春に二塁手・副主将でリーグ優勝。日本石油では66年に制定された社会人ベストナイン受賞。翌67年には都市対抗優勝。現役引退後は74年に早大監督として2度のリーグ優勝、74年は大学選手権優勝。85年から94年までプリンスホテル監督。85年から9年連続で出場した都市対抗では89年に優勝。95年に巨人の編成本部長補佐兼二軍統括ディレクターに就任。00年の退任まで編成部長などを歴任。現在は全国で講演活動や、野球指導を行っている。